

## 秀吉と能

金 光 哲

### 一 秀吉の演能

- 1 謡曲『弓八幡』『呉服』『難波』
- 2 謡曲『弓八幡』
- 3 北九州の掛幅縁起絵

### 二 豊公能と首斬り

- 1 『明智討』『柴田』『北条』
- 2 『吉野参』『高野参詣』

キーワード：秀吉の朝鮮侵略、謡曲『弓八幡』・『呉服』・『難波』、掛幅縁起絵、豊公能、首斬り

本稿は、能の大成者世阿弥の作品『<sup>ゆみやした</sup>弓八幡』・『<sup>くれは</sup>呉服』・『<sup>なにか</sup>難波』と秀吉、秀吉のために作られ、秀吉も自演した「豊公能」を考察し、秀吉の朝鮮観に肉薄してみようとするのが目的である。

### 一 秀吉の演能

#### 1 謡曲『弓八幡』『呉服』『難波』

小瀬甫庵『太閤記』（新日本古典文学大系）巻十四の「將軍於<sup>な</sup>名護屋<sup>に</sup>癸巳御越年之事」に

よれば、文禄二年（1593）正月、朝鮮侵略の総司令部名護屋城にて、豊臣秀吉は謡曲『弓八幡』を自演し、「弓八幡は天下を治め民を安ずる能なれば、御稽古有しが、事外、<sup>よ</sup>宜しく侍よしのみにて有しなり」（387頁）と発言した。四月九日にも「弓八幡」を自演（405頁）した。

秀吉は、文禄元年三月二十六日に京都を立ち、四月二十五日に名護屋に到着、翌年七月二十二日まで滞在した。滞在中の八月十三日には、秀吉の「御所望<sup>(1)</sup>」によって、金春安照が演じている。また、文禄二年三月五日付北政所宛書状<sup>(2)</sup>に、「呉服」ほかの「能十番おぼへ申し候」とあるように、名護屋城で「弓八幡」や「呉服」などの稽古に熱中した。

秀吉の能見物の最初は、天正十一年（1583）十月三日<sup>(3)</sup>の大阪城での観世宗節等の能であった。秀吉と謡曲「弓八幡」との出会いは、天正十三年七月、禁裏に参内して「弓八幡」以下五番の組織<sup>(4)</sup>が最初であった。

能勢朝次氏の「演能曲目考<sup>(5)</sup>」によれば、天正十三年七月十三日、秀吉の命により禁裏において、「弓八幡」「呉服」が演じられている。能

(1) 天野文雄著『能に憑かれた権力者』（講談社選書メチエ）1997年、88頁。

(2) 桑田忠親著『太閤の手紙』、文芸春秋新社、1959年、199～201頁。前掲書『能に憑かれた権力者』95～6頁。

(3) 森末義彰「能と保護者」、『能楽全書』第二巻、東京

創元社、1981年、362頁。前掲書『能に憑かれた権力者』第一章の注6。

(4) 前掲書「能と保護者」362～3頁。

(5) 能勢朝次著『能楽源流考』、岩波書店、1987年。

勢氏によれば、秀吉は天正十八年正月二十一日、浅野長政邸に「御成」し、「難波」「呉服」を観能した。

「天正十八年毛利亭御成記<sup>(6)</sup>」によれば、九月十八日に毛利輝元邸に「御成」し、「呉服」ほか三番を、翌十九日には「弓八幡」「難波」など九番を観能している。

文禄期にはいつて、『駒井日記<sup>(7)</sup>』文禄二年閏九月十三日条によれば、秀吉は「難波」ほかを演じさせている。十月五日・七日・十一日には有名な三日間の「禁裏能<sup>(8)</sup>」を行った。秀吉は、初日に「弓八幡」を自演した。これについては、『三藐院記<sup>(9)</sup>』所収の「禁中猿楽御覧記」において、近衛信伊は「抑、太閤御能神変奇特也」と評している。秀吉は三日目の十一日に「呉服」を自演した。

『駒井日記』文禄三年正月二十九日条によれば、「太閤様御所望」によって関白秀次に「呉服」を演じさせている。また、文禄三年九月十八日の「大坂西丸御能之事」(『太閤記』卷十五)によれば、「田村」を秀吉が演じ「呉服」は金春安照が演じている。

秀吉の朝鮮侵略の意図を確認できる最初の文書は、天正十三年九月三日付「伊予一柳文書<sup>(10)</sup>」である。天正十九年に名護屋城の築城を開始し、翌年の文禄元年(1592)四月に侵略を開始した。つまり、秀吉が能に熱中していった過程は、朝鮮侵略への準備と進捗の道程と全く同一の軌道上にある。

## 2 謡曲のあらすじと世阿弥の思想

秀吉にとって、謡曲『弓八幡』『呉服』『難波』への接近はどんな意味を持つのか。

謡曲『弓八幡<sup>(11)</sup>』は、石清水八幡宮(京都府八幡市)の「二月初卯」の神事に、後宇多院の命でワキの「陪従(東遊の楽人)」が参詣する。そこに「桑の弓」を入れた袋を持つシテの老翁が登場し、「君安全に民<sup>あづ</sup>敷く、関の戸ざしもささざりき、もとよりも君を護りの神国」の「君安全と祈り申す」老翁が、「桑の弓」の後宇多院への献上を申し出て、これが「神慮」であり「神託」であるという。

「陪従神」が、「桑の弓<sup>よもぎ</sup>の矢にて世を治めし謂れ」を聞くと、シテの老翁は、「当社の御神力なり」といい、

シテ「然るに神功皇后、三韓を鎮め給ひしより、

地謡「同じく応神天皇の御聖運、御在位も久し国富み民も、豊かに治まる天が下、今に絶えせぬ御貢とかや。

と、続ける。

地謡のなかで、応神天皇が宇佐八幡宮や洛陽の南の石清水の霊社として現れ、「されば神功皇后も、異国退治の御為に、九州四天寺の峯に於て、七箇<sup>しちか</sup>日の御神拜」をした。「国土を護り給ふなる八幡三所(神功皇后、応神天皇、比咩大神)の神託ぞめでたかる」と謡う。

そしてシテの老翁は、「高良の神とは我」と名乗り、「八幡大菩薩の御神託ぞ疑ふな」といい消える。後ジテ(君守の高良の神)は、「神舞」を舞う。

(6)『統群書類従』第二十三輯下。

(7)『改訂 史籍集覧』第二十五冊、臨川書店。

(8)「文禄二癸巳年十月五日於禁裏御能組」、『統群書類従』第十九輯下。『駒井日記』文禄二年十月七日程。

(9)『三藐院記』166頁、史料纂集、統群書類従完成会。

(10)岩沢愿彦「秀吉の唐入りに関する文書」、『日本歴史』

163号、1962年。のちに、戦国大名論集『豊臣政権の研究』、吉川弘文館、1984年に収録。

(11)大和田建樹著『謡曲評釈』第七輯、博文館、1908年。野上豊一郎著『註解 謡曲全集』第一巻、中央公論社、1971年。

これが『弓八幡』の梗概である。秀吉は、シテの「老翁」と後ジテの「高良の神」を自演したのである。

『弓八幡』については、父世阿弥の芸談を次男元能が聞き取った『申楽談儀<sup>(12)</sup>』に、

まづ祝言のかかり直ぐなる道より書き習ふべし。直ぐなる体は弓八幡なり。曲もなく、真直なる能なり。当御代のはじめのために書きたる能なれば、秘事もなし。

とある。

これについては、世阿弥が足利義教の將軍繼承を祝うとともに、「実権は將軍にあっても、天下の治世は天皇の治世としてとらえられている」とする相良享氏の主張<sup>(13)</sup>に、かつて拙稿「難波津の歌と『新羅人』王仁」において、同意<sup>(14)</sup>したことがある。この見解は今も変わりはない。

さて、世阿弥の『呉服<sup>(15)</sup>』の「当今に仕へ奉る臣下」は、「呉服の里」に着く。そこへ呉織と漢織の二人が登場し、

シテ「これは応神天皇の御宇に、めでたき御衣を織り初めし呉織・漢織と申しし二人の者、今まためでたき御代なれば、現に現れ来たりたり。

と、応神天皇の時代に渡来し、今の世に再び姿を現した由来を語り始める。

応神天皇の時代を次のように描写する。

シテ「然るに神功皇后、三韓を従へ給ひしより

地謡「和国異朝の道広く、人の国まで靡く世の、わが日の本は長閑なる御代の光はあまねくて、国富み民豊なり

シテ「東南雲収まりて、西北に風静かなり

地謡「応神天皇の御宇かとよ……

とし、最後に「とりどりの御調物、供ふる御代こそめでたけれ」と、応神天皇の時代を讃美して終わる。

世阿弥の『難波<sup>(16)</sup>』の「当今に仕へ奉る臣下」は、早春の難波の里に着く。時代は、「皇<sup>すめらぎ</sup>」の畏き御代の道広く、国恵み民を撫でて、四方に治まる八州の波<sup>ひつぎ</sup>で、「天つ日嗣の御調物、運ぶ巷や都路の、直なる御代」である。

シテの老翁が登場し、「咲くやこの花と詠じつつ、位をすすめ申せし百済国の王仁」であることを明らかにする。中入り後、後ジテが「王仁の霊」として現れ、「われはまた百済国よりこの国にわたり、君を崇め国を守る王仁と言ひし相人なり」と名乗り、仁徳天皇の時代を讃美する「神舞」を舞って終わる。

拙稿「難波津の歌と『新羅人』王仁」において検討したが、世阿弥はこれらの謡曲に、神功皇后が「三韓を従へ給ひしより」、「異朝の道」が開かれ、三韓からの「御調物」によって、応神天皇や仁徳天皇の時代が、「御代の光はあまねくて、国富み民豊か」であるとする思想を形象化した。

『弓八幡』の「されば神功皇后も、異国退治の御為に、九州四王寺の峯に於いて、七箇日の御神拝」もそうであるが、同じ世阿弥の作品『箱崎<sup>(17)</sup>』に、「抑、此箱崎の松と申は、忝も神功皇后異国退治の御時、此国にくだり、戒定恵の三学の妙文を、金の箱に入て此松の下に埋給ふにより、箱崎とは申也」とあるように、鎌倉初期に生成し、末期に石清水八幡宮で集大成さ

(12) 田中祐校注『世阿弥芸術論集』、新潮日本古典集成。

(13) 相良享著『世阿弥の宇宙』、ベリカン社、1990年、32～3頁。

(14) 拙著『中世における朝鮮観の創出』、校倉書房、1999

年、128頁。

(15) 新潮日本古典集成『謡曲集』中。

(16) 新潮日本古典集成『謡曲集』下。

(17) 『謡曲全集』下巻、国民文庫刊行会、1911年。

れた『八幡愚童訓<sup>(18)</sup>』甲の「新神功皇后譚」に依拠し、作品化したものであった。

秀吉の『弓八幡』等への接近は、世阿弥の朝鮮観の投影を意味し、連綿とした伝統としての「新神功皇后譚」の影響下にあることを示していた。

### 3 北九州の掛幅縁起絵

『八幡愚童訓』甲によれば、神功皇后の妹の豊姫と高良神と安曇磯良が、龍宮より「乾珠満珠」(173～4頁)の二つの珠をかりる。

新羅との海戦で、高良が「乾珠」を海に入れると、大海が陸地になり、「異国ノ軍兵悦テ船ヨリ下リテ責来」た。今度は「満珠」を入れると、「敵軍既如<sub>レ</sub>魚」になり「民屋浮流」した。このため高良神を、「此珠ヲ投給フ故ニ、高良ヲバ玉垂宮トハ申也」とする。

新羅軍は降伏して、「我等日本国ノ犬ト成、日本ヲ守護スベシ」と誓った。神功皇后は「大磐石」に「新羅国ノ大王ハ日本ノ犬也」(176頁)と刻み帰国した、とする。

細川幽斎の紀行文『九州道の記<sup>(19)</sup>』は、『太閤記』巻第十に『幽斎道之記』としても収録されているが、天正十五年(1585)五月二十三日条に、

やうゝ志賀の嶋に着て、金剛山の宮司の坊にやどりて、当社大明神の由来など尋けるに、春日・鹿嶋当社おなじ御ちかひの神なりと物語有。縁起などとり出してみせらるる次に……。当社は、安曇磯良丸と云て、神功皇后異国退治の時、龍宮より出て、兵船の楫とりして、海上のしるべせし神な

り。

とあって、幽斎は志賀海神社で三幅の「掛幅縁起絵」を見ている。

「掛幅縁起絵」は、『八幡愚童訓』甲の影響で成立した「八幡縁起絵巻<sup>(20)</sup>」に依拠し、北九州の地域を限定して室町期に成立した一連のものである。

昭和六十二年、大阪市立博物館で特別展『社寺参詣曼荼羅』(三月十五日～四月十九日)が開催され、福岡県久留米市御井町の高良大社、久留米市大善寺町の玉垂宮、佐賀県三養基郡の千栗<sub>ちぐり</sub>八幡宮の「掛幅縁起絵」が出品された。

玉垂宮の「掛幅縁起絵」は、箱の銘によって、古い縁起絵が破損し、南北朝期の建徳元年<sup>(21)</sup>(1370)に新しく描いたものとされるが、その他の掛幅縁起絵は、「志賀海神社縁起」をふくめ室町時代の成立である。

豊臣秀吉は九州の島津義弘攻略のため、天正十五年三月一日に大坂を出発。二十五日に赤間関に到着し、二十八日に海上を豊前小倉に渡った。そのとき、細川幽斎は秀吉軍に合流のため、領国の丹後を四月二十一日に出発、山陰道を通り、二十三日に赤間関から小倉に渡り、志賀の嶋を経て二十五日に箱崎に入り、六月八日にそこで合流している。

『太閤記』に、「五日、筑前之内、甲良山」(248頁)とあるように、秀吉は「高良山」に陣を張った。この久留米市御井町の高良山に、「高良大社」が鎮座する。

大阪市立博物館の特別展には、玉垂宮の「高良玉垂宮御縁起<sup>(22)</sup>」も出品された。『八幡愚童訓』甲の「新神功皇后譚」を漢文体にしたもの

(18) 日本古典文学大系『寺社縁起』。

(19) 『群書類従』第十八輯。

(20) 拙稿「研究ノート『八幡縁起絵巻』」、『東アジア研究』第18号、1997年、大阪経済法科大学アジア研究所。

(21) 菊竹淳一「九州の縁起絵」、『毎日芸術』76号、1970年。西田長男「高良大社の聖母神像」、同著『日本神道史研究』第一巻、講談社、1978年、463～5頁。

(22) 前掲書「九州の縁起絵」。小林健二「大善寺玉垂宮」

で、玉垂宮の一本、高良大社の二本をふくめ、計六本が存在する。室町末期から江戸初期の書写年とされる。

高良社の「掛幅縁起絵」や「高良玉垂宮縁起」と、天正十五年六月五日の秀吉と関連づける直接的な資料はない。しかし謡曲『弓八幡』の老翁の本体は高良神で、高良大社の祭神であった。したがって、この高良山での陣の設営が、「新神功皇后譚」への理解の進捗に無影響であったとは、考えることは出来ない。

太田牛一の『太閤さま軍記のうち<sup>(23)</sup>』に、

今度、太閤秀吉公、入唐御門出に、志賀の島吉祥寺宮司せうこうそうとう、右の縁起聚楽へ持ちきたり、山中橋内を以て上覧に供へたて奉り、御本意に達せらるへき奇瑞眼前也。そうとう御服、金銀拝領。かたじけなき次第也。

とある。

これによれば、志賀海神社の神宮寺吉祥寺の宮司が、京の聚楽第に「縁起三巻」、つまり「掛幅縁起絵」三幅を持参し、朝鮮侵略直前の秀吉に「上覧」し、「御服、金銀」を拝領している。

文禄元年三月二十六日、京を出発した秀吉一行は、『豊鑑<sup>(24)</sup>』巻四の「高麗之乱」に、

日をへて長門の府に至給ふ。こゝの御社は仲哀天王、神功皇后などあがめ奉り、満干鹽の玉などおきの方に二つの島有。此、軍の誓ひ有御神なれば、分て拝し給ふなるべし。

とあるように、下関市長府の「忌宮神社」の沖

合の「乾珠島・干珠島」の二つの島に「分て拝し」て、「軍の誓ひ有御神」神功皇后に勝利を祈念した。

この「乾珠島・干珠島」については、『八幡愚童訓』甲に、「海上ニ浮ビ出タル二嶋ハ、乾珠・満珠ヲ投置給シ所、追津・平津ト名付タリ」(178頁)とあり、文明十二年(1480)に山口から北九州にかけて旅行した宗祇の『名所方角抄<sup>(25)</sup>』に、「奥津・平津とて二つ嶋あり。……沖なる満珠なり。奥津也。汀ちかき干珠也。平津也」とある。

ところで、嘉吉三年(1443)の朝鮮通信使の書状官申淑舟の『海東諸国記<sup>(26)</sup>』に、「長門州乾珠・満珠島」(154頁)とあって、室町期には「乾珠島・干珠島」と呼ばれていたことが確認できる。

このように秀吉の朝鮮観は、院政期から鎌倉初期に形成された「新神功皇后譚」の歴史思想の影響を受けたものであった。

## 二 「豊公能」と首斬り

### 1 『明智討』『柴田』『北条』

『太閤記』巻第十六、「於大坂新謡御能之事」に、

同三月十五日、大坂本丸におゐて、由己法師<sup>播州人也</sup>新作の謡、芳野花見・高野参詣・明智・柴田・北条此五番、金春八郎に仕舞を沙汰し候へと、兼て被仰付。

とあるように、文禄三年三月十五日より以前に、大村由己に「新作の謡<sup>(27)</sup>」の詞書を書かせ、金

縁起の絵解き」、林雅彦・渡辺昭五・徳田和夫編『絵解き—資料と研究—』、三弥井書店、1989年。

(23)原題『大かうさまくんきのうち』、影印は汲古書院、1975年。翻刻は戦国史料叢書『太閤史料集』、人物往来社、1965年。

(24)『群書類従』第二十輯。

(25)柿衛文庫蔵(兵庫県伊丹市)。

(26)田中健夫訳注『海東諸国記』(岩波文庫)。

(27)前掲書『謡曲評釈』第九輯付録。

ばる  
春安照に節付をさせた。そして三月十五日には、秀吉自身新作の「御能を遊」ばした。

「芳野花見」は『吉野詣』、「明智」は『明智討』で、「高野参詣」は『高野詣』ともいう。歴史的事実でいえば、『明智討・柴田・北条・吉野詣・高野参詣』の順で、朝鮮侵略以前の事由でいえば「明智討・柴田・北条」、侵略中の事由が「吉野詣・高野参詣」となる。

天正十年(1582)六月二日、明智光秀に急襲された織田信長は、四条西洞院の本能寺において切腹した。そのとき秀吉は四国高松にいた。『明智討』は光秀への復讐がテーマで、秀吉が「急ぎ光秀が頭を刎ねうずるにて候」と名乗り、京と大坂の境の山崎へ向かう。

謡曲では、秀吉が光秀を討った事になっているが、光秀は坂本への脱出途中、百姓の竹槍に殺されている。『兼見卿記』<sup>(28)</sup>六月十六日条に、「向州頸・胴体於本能寺曝之」とあるように、光秀の「頸・胴体」は本能寺にさらされた。

また、家臣の齊藤利三は、「渡洛中於六条川原刎首。日向守同前曝之」(十八日条)と、洛中を引きまわされ、六条河原で首を斬られ、さらされた。

『柴田』は、天正十一年の柴田勝家の敗北を題材に取っている。秀吉は信長の後継を勝家と争い、四月二十一日の「賤ヶ岳合戦」で破った。勝家は「北ノ庄城」に逃げ、『兼見卿記』二十四日条に、「柴田於越州北庄居城而切腹。彼女共数人刺殺、次天主ニ懸火、悉相果云々」とあるように、妻子を次々に刺殺し、自身も自害した。

五月六日条に、「柴田息<sup>十四才</sup>、佐久間玄蕃今度生捕。今日上洛云々。……柴田息於佐和山

辺生害云々」とあるように、勝家の子権六と佐久間盛政は捕らえられ、京に送られた。

大村由己の『柴田退治記』<sup>(29)</sup>(柴田合戦記)によれば、「車渡洛中於六条河原誅之。柴田権六首同懸獄門者也」とあり、『余吾庄合戦覚書』<sup>(30)</sup>下、「柴田権六・佐久間盛政被刑」には、「柴田・佐久間二人ノ者共ヲ、早ク洛中ヲ引渡シ、六条河原ニテ首ヲ刎ヘシト御渡サレケレハ、……京中ヲ引渡シケリ」と、若干異なる。

『柴田』のワキは、「勝家のゆかりの者」で、「賤ヶ岳」を通して「北ノ庄」に着く。そこへシテの老翁が登場し、勝家の墓所に案内し、自宅へ連れて行く。ワキの要望によって、「北ノ庄」での勝家の最後の様子を聞かせる。

当事者しかわからない「私語」を語る老翁に対し、「如何なる人ならん」と問いかけると、勝家の「妄執(迷いの心)」と打ち明け、姿を消す。最後に、甲冑姿の「勝家の幽霊」が現れ、自害の様子を再び語って終わる。

『北条』は、天正十八年(1590)に滅亡した小田原の北条氏政がワキである。七月五日北条氏が降伏。秀吉は氏政・氏照兄妹に切腹を命じ、二人は十一日切腹した。

『多聞院日記』<sup>(31)</sup>七月二十六日条に、「父ノ氏正<sup>(政)</sup>・弟奥州ノ守ハ生害。則盆以前ニ、首ニツ京へ上了」とあるように、氏政と氏照の首は京に運ばれ、「洛之炭橋」<sup>(32)</sup>(一条堀川橋)にさらされた。

また、徳川家康の娘婿の氏直は、高野山に追放され、翌年十一月に病死、北条氏は滅亡した。北条氏滅亡後、秀吉は宇都宮・白河・長沼・黒川と進み、奥州を平定し、日本を統一した。

『北条』のシテと後ジテは、ともに「氏政の

(28)『史料纂集』、統群書類従完成会。

(29)『群書類従』第二十一輯。

(30)『統群書類従』第二十輯下。

(31)増補史料大成『多聞院日記』四、臨川書店。

(32)前掲書『太閤記』巻十二、「氏政氏照兄弟切腹之事」。

幽霊」で、後ジテは「うしろより陸奥守首打ち落し、我も又、腹切り果てし事こそは、比類もあらぬ心なれ」と語る。そして、「蝦夷が千島に至るまで、心のまゝに治め置き、還御なるこそ奇特なれ」と、秀吉を美化して終局する。

『柴田退治記』の「渡<sub>レ</sub>洛中<sub>一</sub>……懸<sub>レ</sub>獄門<sub>一</sub>」とは、「大路を渡され、獄門に懸けらる」と同じことである。例えば、平治元年(1159)の「平治の乱」で殺された藤原信西について、『保元物語<sup>(33)</sup>』下に、「山ノ奥ニ埋レタルヲ掘リ興サレテ、首ヲ被<sub>レ</sub>切、大路ヲ渡サレ、獄門ノ木ニ被<sub>レ</sub>懸シ事」(133頁)とある。

『平治物語<sup>(34)</sup>』に、「検非違使、大炊御門河原にて信西が首をうけ取、大路を渡、東の獄門のまへなる<sup>あふち</sup>櫓の木にぞかけてける」(164頁)とあるように、別の場所で斬られた首は、検非違使が賀茂川の六条河原で受け取り、その後、洛中を引き回し、獄門に首をさらした。『保元物語』に、「信頼卿、軍ニ負ケ、六条川原ニテ被<sub>レ</sub>切ヌ」(133頁)とあるように、六条河原はまた、歴史的に処刑場であった。

獄門は左京の近衛南・西洞院西の「東獄(左獄)」と、右京の勘解由南・西堀川西の「西獄(右獄)」があり、歴史的に斬られた首は、そのどちらかの獄門の木に懸けてさらした。これが「獄門に懸けられる」ということであった。

## 2 文禄の役と『耳塚』

天正二十年=文禄元年(1592)四月十三日(日本暦十二日)、対馬の宗義智と娘聳の小西行長の第一軍は、釜山に上陸、翌日大虐殺を行った。

藤木久志氏は「織田・秀吉政権」(『日本の歴

史<sup>(35)</sup>』15)に、四月二十二日名護屋に到着した佐竹義宣の家臣・平塚滝俊の見聞を紹介している。これに、

高麗のうち二・三城せめ落し、男・女生け取、日々参り候よし。首を積みたる舟も参り候よし申し候。これは見申さず候。女・男はいづれも見申し候。(350頁)

とあり、侵略当初から名護屋には、「生け取」の男女と「首を積みたる舟」が到着していたことが判明する。

秀吉の二度目の名護屋下向は、十月一日に大坂を出発し、到着日は不明であるが、翌年八月十四日まで在城した。名護屋在城中の四月十二日付「朱印状<sup>(36)</sup>」で、「もくそ城取巻、被<sub>レ</sub>討果<sub>一</sub>候へて不<sub>レ</sub>叶事候」と、全滅を命令した。

文禄元年十月の慶尚道普州城の防衛戦は、牧司金時敏の卓越した指揮力で、日本軍は撃退された。金時敏は戦死したが「木曾判官」、普州城は「もくそ城」と呼称され、秀吉や日本軍の憎悪の対象となった。

文禄二年六月十九日から二十九日までの戦いで、侵略軍は牧司朴礼元を「牧司金時敏」と誤解し、朴礼元と「大将分」の頸を斬り、秀吉の「実検」のため名護屋城に送った。

『多聞院日記』七月十九日条に、

高麗ノアカクニ悉打果、二万計討取云々。  
大将ノ首ナコヤヘ来云々。

と、奈良興福寺の英俊は名護屋到着の消息を記しており、『征韓録<sup>(37)</sup>』巻之三、「牧司首、名護屋に渡る事」に、

城主牧司が首、並に大将分の人の首ども、  
合て十余級名護屋に献じ、殿下の実検に備

(33)新日本古典文学大系『保元物語・平治物語・承久記』。

(34)前掲書『保元物語・平治物語・承久記』。

(35)『日本の歴史』15、小学館、1975年、350頁。平塚滝俊の見聞は、岩沢愿彦「肥前名護屋城図屏風について」

『日本歴史』206号、吉川弘文館、1970年。

(36)『大日本古文書』毛利家文書之三、第928号。

(37)『島津史料集』、第二期『戦国史料叢書』六、人物往来社、1966年。

へ奉るの処に、斜めならず御大悦有て、則ち都に登せ、大路を渡させよとぞ聞へける。とあるように、「大悦」した秀吉は首を京都に送らせた。

『時慶卿記<sup>(38)</sup>』七月二十日条に、

モクソ判官、赤国ノ<sup>(主カ)</sup>□、頸京着ト也。

と「京着」し、『立入左京亮入道隆佐記<sup>(39)</sup>(立入宗継記)』に、

赤国もくそうか城へ被<sub>レ</sub>取懸。大将分者共四人討捕首京着候て、聚楽かや木橋に首を被<sub>レ</sub>相懸候。

とあるように、首は聚楽第の「かや木橋」にさらされた。

戦場で「首斬り」はどのように行われたか。たとえば、『戦国合戦絵屏風集成<sup>(40)</sup>』第二巻の、大阪城天守閣蔵『賤ヶ岳合戦図屏風』右隻・第三扇に、首のない武者が倒れており、第四扇に福島正則がその「首」をもち、秀吉の本陣に戻っている。

同集成所収の天正十二年四月の犬山成瀬家蔵『小牧長久手合戦図屏風』第一扇中間に、刀に首を突き刺した徒歩の武者が、下方に首のない武者が描かれている。三扇の下方と六扇の下方に、うしろから組みつき腰刀で首をかき切っている。これが、戦国時代の戦場での「首斬り」のやり方である。

普州牧司や「大将分」の首の『耳塚』埋葬説が江戸時代にあった。慶安三年(1650)跋をもつ『毛利秀元記<sup>(41)</sup>(毛利家記)』巻之三に、「普州の城を攻落し、大将牧司を討捕り給ふ。其外

一万余の印を日本へ渡させ給ふ」とあり、「<sup>きて</sup>櫓、右の首は大仏の前に塚を籠め、首塚と号けられ之あり」とある。

また、寛文十年(1670)成立の『続本朝通鑑<sup>(42)</sup>』巻第二百二十一、文禄二年六月普州条に、「此戦所<sub>レ</sub>得首級一万餘。秀吉則<sub>レ</sub>其耳<sub>レ</sub>遣<sub>レ</sub>於京。埋<sub>レ</sub>於新造大仏殿辺<sub>レ</sub>号<sub>レ</sub>耳塚」とある。

侵略当初の「首」の日本送致や、文禄二年の普州城将兵の「首」の「京着」以外にも、拙稿「耳塚と阿弥陀ヶ峰<sup>(43)</sup>」で「文禄の役」でのいくつかの事例について言及した。ただ文禄期の「耳塚」築造を、文獻的には上記以外には確認できない。

しかし、慶長二年(1597)九月、全羅道南原城と慶尚道黄石山城の将兵の「首」と「鼻」が到来し、秀吉は施餓鬼の施行を命じた。『日用集<sup>(44)</sup>』慶長二年九月二十五日条に、

為<sub>レ</sub>大明朝鮮闘死群靈<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>築之塚、尤小也。縦横广大而、其後施食可也云々。……太閤御意趣者、先読<sub>レ</sub>施食<sub>レ</sub>明春可<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>塚广大<sub>レ</sub>之由也。

とあって、「广大」にする前の塚が、文禄期の「耳塚」であった可能性がある。

さて、林羅山の『豊臣秀吉譜<sup>(45)</sup>』下に、「文禄之比、有<sub>レ</sub>石川五右衛門者。……遂、捕<sub>レ</sub>石川<sub>レ</sub>且縛<sub>レ</sub>其母并同類二十人許<sub>レ</sub>烹<sub>レ</sub>殺<sub>レ</sub>之三条川原」とあり、石川五右衛門は「三条川原」で「かまゆでの刑」に処せられた。

『言経卿記<sup>(46)</sup>』の文禄三年八月二十四日条に、「一、盗人<sup>スリ</sup>十人・子一人等釜ニテ煮ラル。同

(38)西本願寺蔵。

(39)『続群書類従』第二十輯上。

(40)『戦国合戦絵屏風集成』第二巻、中央公論社、1988年。

(41)『西国太平記・毛利秀元記』(国史叢書)、国史研究会、1915年。

(42)『本朝通鑑』、国書刊行会、1918年。

(43)拙著前掲書『中近世における朝鮮観の創出』240～5頁。

(44)『鹿苑日録』第二巻、続群書類従完成会、1990年、368頁。

(45)大阪府立中之島図書館蔵。

(46)『大日本古記録』、岩波書店。

類十九人磔ニ懸<sub>レ</sub>之。三条橋南ノ川原ニテ成敗ナリ。貴賤群衆也」とある。

また、アビラ・ヒロンの『日本王国記<sup>(47)</sup>』第五章には、「十五人の頭目は生きたまま油で煮られ、彼らの妻子、父母、兄弟、身内は五親等まで磔に処せられ、盗賊らにも子供も大人も一族全部もろとも、同じ刑に処せられた」と、描写する。

『言経卿記』・『太閤記』巻十七・『太閤さま軍記のうち』などによれば、秀吉は文禄四年七月十五日、関白秀次を高野山で切腹させ、八月二日、三条河原に秀次の「御頸」を西向きにした前で、妻子・愛妾など三十九人を「御成敗」した。

このように秀吉は、明智光秀の「頸・胴体」を本能寺にさらし、普州牧司や「大将分」の首を聚楽第の「かや木橋」にさらした。また三条河原で、石川五右衛門を「釜ゆでの刑」にし、秀次一族を処刑した。この「獄門に懸ける」でない手法は、秀吉の常習的な手法となった。

秀吉は、文禄三年二月二十五日、奈良吉野の花見のため大坂城を出発、二十七日吉野に到着、三月三日に高野山に参詣し、五日「新謡五番」を演能、六日に大坂城に帰った。天野文雄氏は、『吉野詣』『高野参詣』の制作時期を、「吉野への花見の計画が持ち上がった一月末から二月のはじめ以後<sup>(48)</sup>」とする。

『吉野詣』に、

ワキ「……さても太閤大相国、本朝を心のまゝに治め、三韓を平げ、……武勇功を終

へ還御ならせ給ひ、山城の国伏見の里に大宮作りし給へり。又此春は吉野の花見として御参詣の御ことなれば、只今供奉仕り候。

とあるように、大村由己は天皇に対すると同様、「還御」の語を使用し、「三韓を平げ、……武勇功を終へ還御」と秀吉を美化する。

『高野参詣』に、

ワキ「……さても此御所、三韓御退治のため、九州に御在国の砌、北堂御不例、以の外なるよし聞し召され……

と、第一次名護屋在城のとき、秀吉の母大政所の危篤で帰京したことに触れる。秀吉は大政所の死で高野山に青巖山（金剛峯寺）を、文禄二年八月に建立している。

謡曲はついで、「重ねて御下国なされ、三韓御退治にて、文禄二年八月の末、還御候。春立ち返り既に三回に当り候へば、高野山に御登りなされ」と、第二次名護屋在城と帰京後の高野山参詣に触れる。「浄土に登り住む事は、賢き人の孝行」と、秀吉を代弁する。

秀吉は自身、浄土往生<sup>(49)</sup>を望んだ。「阿弥陀峯<sup>ヲ</sup>申山之麓」に遷座を希望する善光寺如来が、七夜つづけて夢に現れたとした。善光寺如来は、中尊が阿弥陀如来の一光三尊像で、その善光寺如来を「大仏殿」に移した。また、阿弥陀峰への埋葬を遺言した。阿弥陀峰の西に「大仏殿」があり、その前に「耳塚」がある。はたして秀吉は、極楽浄土に往生できただろうか。

(47)『日本王国記・日欧文化比較』、『大航海時代叢書』第1期、岩波書店、222～7頁。

(48)前掲書『能に憑かれた権力者』190頁。

(49)拙著『中近世における朝鮮観の創出』263～8頁。

